

林 脩 己 先 生 の こ と ②

小 泉 力



林 脩 己 先 生 肖 像

林脩己先生の園芸と庭園について

林先生が園芸学部の前身である千葉県立園芸専門学校の創設において、大きなはたらきを為したことは、前号で述べました。それでは具体的にどのような業績があったかを紹介したいと思います。

新宿御苑で修業した青年期

鳥取市に生まれ、鳥取農学校を卒業し、新宿御苑の福羽逸人の下で見習生として学ぶことになった。採用の経緯は不明であるが、おそらく林の優れた素質は農学校時代から知られていて、推薦を受けた上だと思われる。農学校で既に技術的な能力は完成していて、厳しい福羽の指導に十分に応えられるものであり、その後は福羽の一番弟子として明治期の日本園芸界での活躍が始まることになる。

当時の日本園芸界は黎明期であり一人福羽逸人が孤高を保持し、日本を代表する園芸家として国際博覧会（フランス）へ出張している。更にフランスに留学し、ヨーロッパの園芸を導入し、園芸書を書いている。当時、日本では今日のように作物別に専門化しておらず、一人で果樹・蔬菜・花卉・造園の全てにわたる知識を持ち栽培し、講演や指導を行う超人的な活動をしていた。

林脩己も福羽を見習い学び、自らも栽培実験を行い実践力のある青年技術者として園芸界に知られるところとなった。福羽もその力を認めて当時の国家的イベントである第4回内国博覧会（京都市）に派遣し、審査補助員として代理の役割を果たさせている。林はこの時に京都の庭園を視察し、その後の日本庭園に対する認識を深めたと思われる。

大隈重信にスカウトされる

明治時代日本の大政治家で伯爵であった大隈重信は、園芸が趣味で邸内に温室を建て、園芸植物を栽培していた。当時、貴族など上流階級では園芸が流行しており、大隈は日本園芸会会長を務める第一人者でもあった。最新の温室はメインのコンサーバトリーを観賞植物で装飾し、国内外の賓客を招いてパーティーを行い、園芸は政治活動の補助手段としても活用していた。この温室を華麗に保つため優れた栽培者を求めていたが、それが林脩己であった。

温室は全て英国からの輸入で、チーク材を使用した建物で貴重なガラス張り、ボイラー設備も完備していた。温室の建設は江ノ島に在った日本最大の温室であった英国人コッキング氏の温室（現在も遺構あり）を参考にして林が行った。

大隈邸では22歳から30歳までその任務にあたり、25名の部下を使役していた。主な仕事は邸内を常に観賞植物で装飾し、そのために温室では洋ラン、観葉植物、鉢物の栽培をし、露地では盆栽、西洋野菜等の栽培をしていた。

大隈邸での業務内容

この点について当時の記録がある。『風俗画報』第二七三号（明治三十六年東陽堂発行）：「大隈伯爵室内の温室」橋本桔梗著 大隈邸での様子を再現してみよう。

大隈邸の温室は、中央にコンサーバトリー（装飾温室）があり南北にホットハウスが接続している。

設計は小壮植物学者林脩己氏之が設計の任に当たりとしている。

構造は中央にあるコンサーバートリーは八稜形で、面積二十六坪余(85.8㎡)、高さ一丈八尺(5.4m)、煉瓦と切石を腰となし、床にタイル張り水を注ぐとすぐに吸収し去る。四方に扉、八面に窓を設け、扉も窓も屋根裏も皆ガラス張である。ガラス張の建築物として、花やかに朝暎夕陽に映じ、八面玲瓏、宛も水晶宮の観あり。

温度は寒中でも、中央五十度(10℃)、南室六十度(15.6℃)、北室五十五度(12.8℃)に設定。南室の一隅にボイラーを置き、各室にパイプを通じて暖を送る。パイプは英国最新式のメインパイプにして、口径四吋あり。



大隈重信邸 コンサーバートリー

栽培していた植物の種類

中央温室に栽培する植物は、主に蘭科植物で、南洋諸島、中央アメリカ、メキシコ、マダガスカル、オーストラリア、サイアム(シャム・現在のタイ王国)、ピロマ(ビルマ・現在のミャンマー連邦共和国)、インド等原産の熱帯植物中葉色の美しい品種を栽培している。花卉は別に中央温室の両サイドに温室を設けてあり、常に培養し花が咲くのを待ち鉢ぐるみ持って来て陳列している。花物類は大抵長くて1か月から10日間位である。調むと再び以前の温室で管理し、他の咲いた花と交換し中央の一室を装飾している。

松谷子が描いた挿画を見ると中央室のコンサーバートリーでは、大隈伯爵夫人が賓客を招き接待している。画面で大きな植物はシンガポールのヤシ、ヒリッピンの産、八丈島のヘボ(ヘゴ)、虎の尾に似た鉢植えは台湾産のセヴラ(一名千載蘭又虎尾蘭)。伊万里焼の鉢に植えて、棚の上に装飾された花卉は、ベゴニア、グロキシニア、コルース(コリウス)、サイクラメン(シクラメン)等にして又南洋産の美麗なる斑文ある蘭科植物を陳列している。

園内を蘭科、花卉、盆栽、菊、果物、野菜、庭園の七部に分ち、林脩己氏が主任となり園丁を使役して、各分担を定めて栽培している。果実蔬菜の類は露地栽培で作り、朝夕食の食事に供している。理科大学(現

東大理学部)附属植物園、宮内省植物御苑に次ぐ、植物標本を蒐集している庭園を有するのは大隈伯爵で、その右に出るものなし。そのため農学校の卒業生で実地研究の為、大隈伯爵の庭園に出入するものが多く、一年、半年、園丁と共に宿泊し練習する人が多い。当時の師範学校、農学校等の生徒は教員が引率して時々参観に来ており、早稲田大学中学では、校内の標本室を見学するように活用している。

大隈重信との関係

大隈重信も熱心な園芸研究者であり自身の著書でも世界のラン科植物の解説をしている。(大隈邸写真集を見ると室内の装飾や温室の栽培状態が見える)

政治家で園芸家の大隈重信を訪れる来客は多人数あり大広間の座敷が準備されていた。対応は息女の大隈熊子が対応し取り仕切っていた。この様な職務の中で林は当時の日本で最も進んだ園芸を行っており、その間にも名声が広まり国内からの指導の要望があつて、これにも対応していた。例を上げれば穂坂八郎名誉教授(大正10年卒)が学生時代に林講師に引率されて大山巖元帥邸の温室の管理をしているのを見学している。余談になるが大山巖は日露戦争を勝利に導いた将軍であり陸軍大臣・元帥・公爵となった人で、ヨーロッパに留学し、洋風好みで自宅はディズニーランドのシンデレラ城の様であつた。妻は鹿鳴館の貴婦人と謳われた大山捨松で、アメリカに留学していたので夫婦の会話は英語ですするという家庭で、温室の管理は林の指導に任されていたと思われる。他家の温室も請け負つていて、あっちこっちに連れて行かれ見学したと穂坂先生が発言している。

英米仏に留学

明治37年(1904)に農商務省の海外実習練習生として選ばれ英国に派遣されることが決定し、大隈邸を去ることになった。当時、政府は海外の産業を習得させるために世界各地に研修生を派遣していた。大正6年12月1日現在の『海外実業練習生一覽』(農商務省商工局発行)によれば、明治29年から大正8年までに707名が派遣されており、園芸業は22名であつた。

参考)

明治37年度は2名で林の他に本間啓太郎が米国に派遣されている。

明治42年に坂田武雄(サカタのタネ創業者)が米国に派遣されている。

英国での研修

林が渡英した明治37年12月に書いた手紙があり、これが日本園芸会雑誌に再録されており、渡航当初の様子がうかがわれる。これは東京市の公園係担当の長岡安平に宛てた私信であったが、その内容が英国の様子を知るのに役立つとして当雑誌に再録したものである。

これによれば英国に来てはみたものの、どこで研修したらよいか分らず1カ月が過ぎた。どのようにして園芸会社にたどり着いたかは不明だが、交通手段は主に馬車で、さしずめ御者にでも捜させたのか現在のタクシーの様であったかと思われる（当時地下鉄や蒸気機関車もあった）。

当時のロンドンに園芸会社は多数存在したが、中でも有力な会社は現在でも存在するサットン社とヴィーチ社である。当時の園芸会社の温室や栽培農場は林の弩肝を抜くような大規模のものであった。林はそのことをかなり細かく書き送っているので紹介してみよう。

「英国第一等の園藝社に就て、明春まで実地の取調を遂ぐることを相約し候。該社は、^{ロンドン}倫敦に一の会社を有し、其他四ヶ所の養樹園あり、倫敦の本店には温室四十餘棟及び種子部若くは事務所等あり。而して、他の四箇所の養樹園は倫敦距ること六七里外、園の面積二十五町歩乃至四十町歩あり温室の如きも一ヶ所に大概二三十棟を有し、各々植物の種類を分別して栽培せり。詳言せば果樹・蔬菜・庭木・花卉若しくは道路の並木等種々分類せられ居候。」

英国の園芸がこの様に発達したのは気候が嫌悪であったのでこれを克服するために、寒冷で曇天の冬に栽培ができる広大なガラス温室を建てたと言っている。また、英国では全てが学理的であり実験に基かないものは評価されず園芸も専門分化しており、日本のように浅く広く何でも知っている風ではない。既に現在の日本の園芸産業のように専門化しているので広く浅く学ぶには不便だと言っている。

キューガーデンに学ぶ

その後英語学校に通学し、キューガーデンにも学ぶことができた。

『大正天皇御即位記念 人物と其勢力（鳥取県の部）林修巳君』によれば

「最初倫敦市ピットマレス学校に於て英語学を修め、38年6月より1ヶ年英国立園芸会員となり、園芸学の講義に出席し並に同会付属園芸試験場に実地及品評会出品物審査法を研究す、又政府公園課長セキスヒー

氏の門に入り、一般庭園に関する講義を聴き博士ウイルソン氏に師事し園芸植物の研究をなす、」
とあり本文からもキューガーデンで学んだことが分る。

林はキューガーデンで大きな役割を果たしている。それは日本の園芸についての講演と菊の歴史についての執筆である。

英国王立園芸協会（RHS）会長から日本公使館を通じて「日本の園芸について」の講演を依頼された。大変な名誉と考えて臨んだその時の原稿が同協会雑誌に英文で掲載されている（1906 JOURNAL OF ROYAL HORTICULTURAL SOCIETY）（1905年5月9日受理・明治38年）。英語での講演内容が帰国後に日本園芸雑誌に紹介されている。これによると日本の歴史を「神武天皇即位以降皇紀二千五百六十有余年を経たる古国なりとも云えども」から始まった歴史について述べ、徳川の太平の時代に日本の園芸が頂点に達したこと、明治維新後の荒廃等を長文で述べている。明治の園芸界については趣味家団体として菊、朝顔、蘭、万年青、桜草、薔薇の会を上げている。日本の園芸作物は蔬菜16種（マクワウリ、キウリ、アカナス、インゲンマメ等）を簡単に紹介している。日本の歴史を多く語った講演内容は、ロンドン公使館の意向もあったためではないだろうか？ 時あたかも日英同盟が結ばれ日露戦争の最中であった。林はこのような時代に英国に滞在し、日本を代表して国威発揚を果たした。

上記論文と併せて「日本の菊」(CHRYSANTHEMUM KIKU The History of Chrysanthemum Cultivation in Japan By N. Hayashi) についても投稿している。日本独特の菊花壇の写真や美しい菊の図を掲載し分類しているが、大菊、中菊、小菊を更に形態的に細分化した分類で、今日流布している分類法の原点となるものであり、この論文は日本で最も早く花型による形態的分類を紹介したものと思われる。この論文の中で日本の野生菊について解説し、皇室と大隈伯爵家で栽培しているとの記述は興味深い。

留学中の西洋庭園視察

英国留学に当たって東京市長よりロンドンの公園についての調査依頼があったが、この公式報告は現在発見されていない。しかし、成田山仏教図書館林脩巳文庫の「庭園に就て」の文中でロンドンの公園についての記録がある。

フランスへの渡航は前記「庭園に就て」の中でヴェルサイユ宮殿の記述がある。その中でトリアリノーを

見てフレーネの設計だと書いている（これはフランス革命でギロチンに処せられたルイ16世と悲劇のヒロイン、マリー・アントワネットの遊んだ田舎屋である）。

また、英国式庭園は英国でウイリアム・ケントにより創設されたが、その後フランスで更に洗練されたのは、フランスの芸術的な伝統によるものと書いている。

米国への渡航は「庭園に就て」の中でニューヨークでは屋上に野球場があり学生や丁稚（若い労働者）が野球をやっていると書いている。屋上で正規の広さの野球場ができたのか疑問であるが、キャッチボール程度ならば可能であろう。

米国へは英国から往復し、その後に渡仏したのか？ 米国経由で帰国したのか？ ロンドンから来た道のスエズ運河経由で帰国したかは不明である。

三菱財閥の岩崎家高輪別邸で園芸主任となる

帰国後は予めからの約束通り岩崎家に雇われた。岩崎彌之助の高輪別邸の建設が明治の建築家ジョサイア・コンドルの設計で行われ、庭園の設計は福羽逸人と林脩己が行い、庭園の施工は林が全てを取り仕切っていた。工事は低地を埋め立て芝生庭園を造ったが、軽便鉄道を敷設し公道を付け替えるなどの土木工事であった。完工後には広い芝生の西洋庭園となり、日本では見られなかった華麗なデザインであった。

しかし、施主の岩崎彌之助が病を得て逝去しこの邸宅に住まなくなったので、林がここで庭園管理を行う意義が薄れてしまった。

千葉県立園芸専門学校の講師となる

この頃に時期を一つにして松戸の戸定が丘に園芸専門学校を造る計画が浮上した。校長は鏡保之助で京都府立農林専門学校校長からの転出であった。鏡校長は千葉県に園芸専門学校を作るに当たり、大隈邸園芸主任当時から有名であり、英国留学し帰国後岩崎別邸の庭園を造った実績のある林を必要としていたと思われる、岩崎家退職と重なり林を招聘することとなった。

林は戸定が丘の園芸学校に理想の西洋庭園を創る構想を持ち、現在も残るイタリア式庭園、フランス式庭園（サンクガーデン）、イギリス式庭園（旧正門の右側で現在は樹木に覆われているが当時は広い芝生に東屋があり江戸川を前に遠く富士山を見る眺望であった）と岩石による日本庭園である。

授業は講師として装飾植物（花卉園芸）・庭園の講義と庭園実習を担当した。

室内花壇

林講師の具体的な授業内容について考察してみよう。明治42年に千葉県庁の新庁舎落成にあたり共進会が行われた。園芸専門学校からは室内花壇の出品があつて数10種類の草花が使われていた。写真と堀江正章の油絵が残っているが、当時の学校での花卉栽培の様子がうかがわれ、林の指導であつたと考えられる。この花壇で使われている花卉については園芸学部100周年記念に発行された『庭園の記憶』に藤井英二郎教授ご夫妻と安藤敏夫教授による植物名の同定が行われており、ダイアンサス（ナデシコ）、ペチュニア、ダイアンサス（カーネーション）、ドラセナ、ナススタウム、マーガレット、カラジウム、グロキシニア、フクシア、ベゴニア、テーブルヤシ、アマリリスのような花、ダリアのような花、この他安藤教授の同定ではキク、マーガレット、パンジーも描かれている。絵画は必ずしも写真ではないとの評である。私の鑑定で追加するのは、ククラツス（大銀竜）、木立ベゴニア2品種とダリアである。



堀江正章：室内草花園（油彩）

この室内花壇は共進会の開催期間が5月5日から20日までなので、この間の展示に適合した開花期を考えた植物を選択している。今日のゴールデンウィークにあたり花卉は選択幅の多い季節であり準備し易い。展示のためには必要な植物数の数倍の鉢植えを松戸の温室で準備しておき、運び入れて室内花壇を作成し、展示会場では灌水など鮮度保持を常時行う必要があつた。

最も注目すべきは室内花壇のデザインである。この様な数百鉢の花卉を組み合わせた花壇はこれまで日本では誰も考えたことがなく林の独創的なデザインと考えられる。共進会のメイン展示であつて、有料中での唯一無料の展示で客寄せの目玉であつた。一般的な花壇はビビットな花を組み合わせた毛氈花壇が主流であるのに対し、葉の色（カラーリーフ）を取り入れた色彩の組み合わせは画期的である。この様な独創的なデザインを着想したのはヨーロッパの庭園や花壇を見て来た林ならではの考えたい。

学生の指導

林先生について調べる中で、吉池貞藏氏（昭和30年卒）にお聞きしたところ手紙が届き、永島四郎氏（大正10年卒）の著書『花のデザイン』のはしがきに、林先生がキューガーデンで学ばれた花の専門家であると記録されていた。永島氏は林先生のアドバイスを受けて花卉装飾の将来性を予見して単身渡米、日本最初のフラワーデコレーターとなってこの道を開いた経過を書いている。

更に次の短歌が添えられていた。

「胸高にガーデンエプロンかけて居たまひし林脩己先生を思ふ」

短歌集 北風南風 埴科史郎（ペンネーム）より
英国仕込みのスタイルで剪定指導をしている写真がある。当時の学生には眩しく映った先生の思い出であろう。

「母校の歴史を語る会」から

本校発足当時の様子は「母校の昔を語る会」昭和17年5月24日の座談会で林先生を囲み、岩田喜雄氏（第1期卒）等が庭園造りの苦労話の思い出を語り合っており、その時の事を林は実に細かく記憶してい

る。なお岩田氏は初代戸定会会長である。

この座談会の中で本校存亡の危機を救ったエピソードがある。それは県立の専門学校であるが県外の学生が多く、また庭園や花作りは千葉県の果樹や野菜の生産に役立たないと県議会から異議が出て廃校が決議されてしまった。その時に同窓会の同志が相談して当時の政治家にはたらきかけて廃校を撤回させることができた。これには当時日本の政界を二分していた憲政会と政友会があり、憲政会は大隈重信系の政党であったので林が大隈に直接はたらきかけたと考えられる。一方の政友会は伊藤博文系の政党でこれは別の同窓生が運動して廃校を免れた。千葉県知事も面目がたち無事まるく納まり、その後国立移管となった。林先生は母校を創り、母校を救った恩人でもあった。

千葉県に転出

明治42年から大正12年まで13年8ヶ月園芸専門学校の講師として勤務した後に、千葉郡都村（現千葉市中央区都町）に新設された千葉県立農事試験場園芸部長として転出し、千葉県の園芸農業に貢献することになった。又、成田山公園を完成させた。紙面の都合でこれらの業績についてはまた別途書いてみたい。